都市計画研究室インタビュー

高見沢実 ＋ 野原卓 ＋ 尹莊植

聞き手
上山、木幡、正林、馬場、八木橋

都市レベルでの提案の減少

正林 ： 今回の自分たちの卒業設計の総評についてお一人ずつお伺いしたいのですが、まず高見沢先生、何かありますでしょうか。

高見沢 ： 今回の卒業設計で、実は最後にコロナで身近な課題にしなさいとかって言われたと聞かされたんだけど、あれは最初に言って欲しかったなとは思ったんですが。まあそれはさておき、非常に特殊な状況で卒業設計、当日の講評会などを思い出してみてもテーマが身近だったなと。身近なことをやったということは現れていると思うんだけど、コロナとかそういう我々に対する脅威、場合によってはチャンスというものをどう今後に活かすか、というテーマについての作品はほとんど無かったなという気がします。その辺皆さんがどう取り組んだのかというのをむしろ知りたいなと。あと総評としては最近何年かの傾向だと思うのですが、都市レベルというより建築設計がやっぱり主流になっていますね。私としては都市計画という立場なので、建築設計では無い立場を敢えてとるにはどうしたらいいかと考えていて、自分の専門の視点からなるべくコメントや評価をしようとやってきているのですが、あんまり都市レベルの設計がなくて困っています(笑)いろんな社会課題に対しての提案だとかそういうのがあまり無くて、むしろ設計でこの辺がいいねというのが多くて、なかなか都市レベルで面白いなと言うのがそんなには無かったと言うと失礼な言い方なんだけど、まあ結構建築レベルの提案が多かったかなというふうに思います。ただし、作品については皆さんすごく頑張っていて、26名見るのも、発表する方も大変だったかもしれませんね。相当パワーのあるレベルの高い作品だったかなと思います。あと残念なのは人数が多すぎちゃって一人当たりの時間が13分でしたっけ？今まで15分あって、2分違うだけで相当細かいとこまで見れなかった、聞けなかったと言う気がするので26人あれば15分×26倍だけ発表しないとやっぱりちゃんとした発表会にならないのかなと思いました。でも最後はとにかく現場で発表する側も先生方本当に真剣にできて良かったなと私もその一員でいられて嬉しいなと

正林 ： ありがとうございます。そうですね最後はちゃんとオンラインではないかたちでできたのは学生側としても良かったと思います。

高見沢 ： あ、コロナの点は知りたいと思いますけどね。

馬場 ： 四年の前期に藤原さんのゼミがあって、その時にコロナなんか建築的テーマを扱う上で大したことないって言う感じの指導があったので、それを最初に言われた時に卒業設計はコロナとはまた別のところで考えるべきなのかなって私たちは意識していたのかなって言うのは結構ありますね。

高見沢 ： 私たちはって、いっぺんに26人そうなっちゃったの？

馬場 ： コロナとか今年度そういうのを扱った人いたかな？

正林 ： それらを考えの主軸としてる人はいないという。

高見沢 ： もちろんね、感覚的には26人もいれば主軸の人が1、2名現れて、後は主軸とはしないんだけど自分の生き方とか感じ方とか、空間に対する思いとか都市に対する考えがちょっと変わったりあるいは変えなきゃいけないと思って何らかのメッセージ的なのが入ってても良いなと思ったってことです。でも先生に大したことないって言われて自分も大したことないって思っちゃうとしたらちょっと怖いなと言う感じ。

正林 ： 都市レベルの提案が少ないと言うことですが、設計が主軸のものが多いってことですよね？

高見沢 ： 僕設計する人じゃないんで思ったんだけど、鎌倉(榊原)の場合も割となんか勝手に建築家がもの作ってんなって感じがしますし、瀬谷(河野)の場合もどっちかっていうとあれは建築設計っていうか、まあ都市ももちろん入ってるんだけど、ちょっと次元が違うかなって僕自身が思っているって言うことです。皆さんが高く評価してたのは理解はしたつもりなんだけど、ちょっと都市計画としては違うかなと。

正林 ： 例えばどう改善するというか、どうするとより面白く都市計画的に考えたってことになるのでしょうか。

高見沢 ： いえ、都市計画的に考えているかどうかは人によってみんな違うと思うんだけど。正林くんの場合で言えばテーマがよく見えないというか、島をどうしたいのか、もしこうしたいっていうんだったらそういうビジョンみたいなのがあってそれを達成するための具体的な仕掛けみたいなのが明確に現れていると良いと思うんだけど、でも現れているのはどっちかというと道との関係でこんなふうに屋根かけましたとか、そういうのは現れているんだけどこれで一体どういう島になるのかというのは私としてはあまり思い浮かばなかったということです。

正林 ： なるほど。今まで敷地が与えられているような課題しかなかった中で、卒業設計は自分で選んで全てを決めていく訳で初めて自分たちで全体のマスタープランを考えるっていうのがみんな苦戦するというか何から始めれば良いかとかその辺が難しいなというか、多分そこなんですかね。

分散型＝都市的な提案ではない

正林 ： では野原さん。総評お願いいたします。

野原 ： はい。総評っていうのも難しいっていうか、26人の集まりだから集まったものに対して全体の傾向言うのもあれですけど。ただ、高見沢先生がある種論点を出していただいたと思うんですけど、今年は本当にそういう意味では社会的状況としてみんなで色々考えざるを得なかったり、共有する状況というのがあったので、そういう意味でのまさにコロナの一年を経てる中でこの26人が将来の建築であれ街であれっていうのをどういうふうに捉えながら考えたのかなっていうのは単純に興味深かったです。先ほど藤原さんからの指導もあったという話もありましたけど、高見沢先生がおっしゃっていたとおり、僕もすごい身近なテーマが多かったなと思いまして。それもカラクリがあったというか(笑)そういう意味では良くも悪くもですけど地に足ついた身近なテーマを一つのヒントにして取り組んでるなというふうには思いましたね。梗概を読んでたら、東野さんの雪のやつとかも本当に自分のおじいちゃんおばあちゃんがこのままだとどうなっちゃうんだろうって不安に思ってるから、提案そのもののリアリティーというより、身につまされた問題っていうのを自分の中でちゃんと意識してやっているものがいくつかはあったかなと思いました。そういうものが今回の特徴だったなという風に思う一方で、だからこそ難しいのかギョッとするっていうか、大胆な提案があったかっていうとちょっと少なかったかなっていう感じがして。それはある意味自分たちの身近に対して、地道に真剣にアプローチした結果、難しいなってなっちゃった面もあるのかなって思いました。そういう意味ではあんまり良い意味でこれはちょっと今まで考えたことないやり方、みたいな提案がもう少し出ても良かったのかなというのはありますね。もう一つ、先ほどの高見沢先生の都市的な考えがないっていうときに、みんなが思ってる都市と呼んでいるものと高見沢先生がおっしゃってる都市っていうものはちょっと違っているのかもしれないと思いました。本番の時のコメントでも言ったんですけど、皆さん都市科学部一期生で、多くの人は僕のフィールドワーク論とかも出てくれたであろう人たちだから、街を見て、街のこと考えて、街を調べてそれをヒントに考えるみたいなのは何となくみんなやってる気はするんだけど、その話と高見沢先生が言ってる都市の話ってちょっと違う気がするんだよね。例えば正林くんの例で言えば、答志島の未来みたいな答志島全体の街のあり方をこういう風に大きく変えていきたいみたいな、そういうのに迫りながらやるっていう提案がちょっと少ないっていうか最近減ってるって思うんですけど。だから都市を見てないわけじゃないんだけど、一つ一つの場所に都市の要素みたいなものをヒントにしながらなんかやってるという提案がすごく多くて、街全体がこういう風な未来を描けば良いんじゃないかみたいなことに迫る案が少ないかなという感じがしています。ただ、小さい建築をたくさん作るみたいなのが皆さんちょっと多くて、僕もどっちかというと建築そのもののデザインより街をそういう風に読み込んで何とかしてるみたいな提案が意外と人気が出るというか。ちっちゃくいっぱいちょこちょこやる案がむしろ皆さんから評価が得られていて…今年、僕は広島のやつ(宮本)に票を入れたんですけど、一つの敷地の中でドーンとなんかやるみたいなのがむしろ減ってる感じがしていて、ちょっと天邪鬼な私がそっちに入れちゃったみたいな(笑)あれみんなこういうのしないんだと思って最後まで固執して広島の作品に丸してたんです。そういう意味で分散型という意味では街をみんな扱う、分散型が街だと思ってる傾向な気がするんですけど、でも扱ってるのはすごいちっちゃいよねみたいな、ちっちゃいのが悪いって言ってるわけじゃないんですけど(笑)

そういう人もいいけど、もうちょっと色んなバラエティーがあったらいいかな。まあバラエティーを見ながらみんな設計しているわけではないので、結果論だからしょうがないですけど、もう少し色んな視点がいっぱい出てきても面白いのかなという風にはちょっと思いました。ただ、高見沢先生もおっしゃっていた通りレベルはみんなしっかりしていてこれはまずそうだなというのは一個もなかった。みんなでいいレベルが保てていたのかなと思いました。

正林 ： なんか今の話すごく自分の中でスッと入ってきました。確かに分散型が多いけど扱っているもの自体が敷地の中の要素に着目しすぎて全体像がちょっと疎かになっちゃうっていうのはその通りだなと思いました。広島の案(宮本)も確か最終で多分一つになったのかな？川沿いに移ったり、分散したりしながら、でも結局一つに戻ったっていうのが色々悩みながらも一つの建築に対する信頼というか、そういうものを信じてやっているのかなっていうのがみえるのかなと思います。

写真：原田雄次

コンテクストを見ること≠コンテクストを活かすこと

正林 ： では尹さん。何か全体として総評をお願いいたします。

尹 ： はい。私まだ二年目なので、傾向は読めないと思うのですが、私も基本的には身近なものをちゃんと地道に取り組んでみんな考えてくれて、全体のレベルも凄く高かったです。正林くんは隣の部屋でやっていたので様子はよくわかっていました。他の人はコロナ禍でどのようにやっていたのかなと凄く気になっていましたが、最終的に出来上がったものを見てみるとすごいレベルの出来上がりだったので、皆さん結構頑張ったのだろうなと思いました。先ほども先生おっしゃっていたように、コンテクストっていうか街をしっかりみるというのはすごいなと思いました。私の時代とかはそんなことあんまりしなかったなと思うので。凄くそういうことに興味があるのか、あるいはそれをしないといけないと思っているのかっていうのはわからないのですが、そこから何らかの街への提案を建築でやろうとすることは凄く良いなと思いました。しかし、それが主流な流れになっているというのはどういう事なのだろうっていうのが気にはなっていますね。で結局ちゃんと街見ましたってことで、昔は都市を変えようとか、こんな都市ではダメだとかこんな開発ではダメだとか、そういうことに対するアンチテーゼとしての提案が結構あったのですが、今はそういう街をちゃんと読む姿勢なのかわからないですけど、それに逆らっちゃダメだとか飛び出すとあかんという皆さんのおとなしさっていうか、そこが少し気にはなっていますね。ですから、そういう小さな分散型の建築になってしまうのもやっぱり街のコンテクストに合わないっていうことから小さい提案になってしまうのかなとは思ったのですが、まあ決してその提案が良くないってことではないです。みんながみんなそういう提案をするのはどうなのかなと思いました。私はコンテクストをみるっていうのは、つまりそれを活かすっていうことの一つの選択にすぎないと思うんですよね。だからさっきの都市のビジョンとか街のビジョンを考えた時に、だからさっきの都市のビジョンとか街のビジョンを考えた時に、本当の未来ってものはどういうものなのだろうってことを自分たちの考えをもとに、街を読んだものをもとに提案してくれると凄く繋がるのですが、順応するっていうか合わせるっていうことは個人的には気になりました。それで、建築そのものも歴史から真似るものになってしまうとか街並みのものを少しアレンジするとか、とにかく合わせるってことになってしまうので、建築そのものの強さとか面白さっていうものが伝わらないものも意外とあったのかな。なので、もうちょっと建築ができることっていうのをしっかり考えて、夢を持って提案しても、それじゃできないよっていう指摘にも、そういうつまんないこと言わないでくださいよっていう気持ちでやったら、どうなのかなと思った点がありましたね。だから凄くレベルは高いし、面白かったんですけど、その上をいくっていうか先生方をハッとさせるような言い方、表現、提案っていうものもあっても良かったんじゃないかなと思いました。

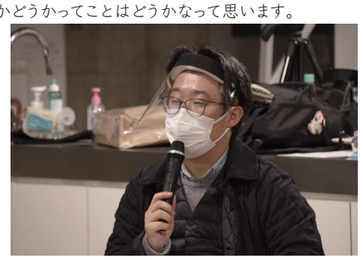
正林 ： ありがとうございます。いやあその通りだなと思ってしまいますね。全体として自分たちの学年は真面目な印象を受ける人が多いなという風に感じている先生方が多い。なので、真面目な中にもなにかちょっと馬鹿になる部分があると提案がもっと面白くなるよねっていう話をされていたのをちょっと思い出しましたね。

馬場 ： 馬鹿になるっていうのはコンテクストを見て活かすってことではなく、そこからどう変えられるかということなのだと思いました。しかし、まだ自分達はできていないのかなと思いました。

野原 ： いや、活かしたかったら徹底的に生かすっていうのがあっても良いのかなという印象かな。

正林 ： 尹さんの話で、尹さんが学生時代というか設計をしていた頃とはやっぱり違うっておっしゃってたじゃないですか。具体的に尹さんが学生の時ってどういうことが主流だったんですか？自分たちはコンテクストを読む人が多いとか。

尹 ： 時代性っていうのは結構反映されると思うんですけど、2000年代っていうのは大規模開発っていうものがたくさん行われた時代でもあって、どんどん街そのものが無くなってしまうこともあったんですね。だからそういう開発に対する反対的な意味での街を保存しつつ魅力を作るっていう提案も結構ありましたし、逆にみなとみらいの北中のところを大規模なイベント施設として提案するとか、その案も怖い先生にめちゃくちゃ怒られたんだけど、けどそれでも一位になってたんですね。だから色んなコンテクストは正しいのがあるんだと思うんですけど。コンテクストもあるし、そこでそういう低密度のものをやっちゃいけないっていう社会的な暗黙のルールとかがあるとしても、それを乗り越えた建築としての力を発揮できる提案っていうのは学生の力なのかなと思うんですよ、卒業設計の力っていうか。
だから先ほど大人しいと言っていたのは、そういうことはいけないっていう暗黙の自分の中で限界のラインがあって、それを超えないための調整って言うか提案、まあそれが現実性を高めるってことには繋がるんだと思うんですけど、提案そのものの面白さに繋がるかどうかってことはどうかなって思います。



印象に残った作品について

尹さんの卒制の敷地も秋葉原だった…

木幡：尹さんが僕と同じく秋葉原で卒業設計をしたって言うのを聞いたのですが、尹さん自身は卒業設計でどういったことをされたんですかね。

尹：基本的には凄く似てるって言うか屋上レベルを橋を作って繋げたってことになるんですが、(木幡くんは)駅の左側の大通りを挟んで敷地にしてるんですよね。私は完全に大通りの左側のみをやっていたのでちょっとそこだけ違うんですけど。
木幡　僕はこの卒業設計は一万平米から継続してやっていて、一万平米のときは左側の通りだけに限定してやっていました。それで秋葉原を考える時にユンさんのときは再開発に対するアンチテーゼとしてのものが多かったということなんですけど、それも一旦落ち着いたこの時代に、どちらかっていうと再開発をどう乗り越えるかっていうことを考えていたところはあって。そういったところはどうでしょう。自分ではできていたかはちょっとわからないんですが。
できているんじゃないですか？私の時は駅前の高層ビルができたばかりの時代だったので、どうしようっていうのが最初の問題提起としてはあったんですけど、それが15年前なのでそれも踏まえて木幡くんが提案してくれたのは凄くわかりやすかった。ただ、屋上とかそういう空間を再利用する時に建築的な限界はあって、空間そのものは変わらないんですよね。それを繋げてやる可能性を見つけようってことの提案なのかなと思ったんですけど。全体的に凄くバランスも良く、アクソメもちゃん描いて表現してくれていたので凄く評価はしました。あと私もその時5位だったので運命を感じるというか(笑)

写真：原田雄次

高見沢：26人もいて5位の方が偉いぞ。(笑)

尹：あああ～～(笑)負けましたということで。(笑)

高見沢：尹さんのとき何人だったの？

尹：20人くらいですかね。

尹：多分一年かけてやってたってことですよね。言いたいこともたくさんあったと思うんですけど短い時間で(発表できていて)よかったのかなとは個人的には思って票を入れました。。

都市計画の視点からの江ノ島

正林：高見沢さん的に印象に残った作品や、何かお話ししたい作品があれば。

高見沢：自分としてはこれはこのままいくと印象に残るはずだっていうのがたくさんあったんだけど、一応江ノ島(馬場)にしてますよね。あぁー図面がいいなと思ったんですよ。さぞかしみんなもあげてるぞっと思って蓋を開けてみると私だけなんて、あれおかしいぞと思って(笑)

野原：でも私も丸はついてます。票は入れてないですけど…。

高見沢：僕もね、自信を持って論理的にこれがいいというような場所ではないので、なんて他の人はあげないのに私だけあげてたのかって不安に思ってこないだ江ノ島に行ってきたんですけど。ウロウロ歩いて、じっくり見てきて、これはやっぱりよかったはずだと自分なりに思いました。馬場くん！いいと思います。

馬場：ありがとうございます。(笑)

高見沢：まあ図面自体も良かったし全体がシンプルにできてるのも良かったんだけど、崖側のところに引っ張り出したというかなんらかの手を加えたものがいくつかありましたよね。それで江ノ島のかつての古い感じのところに新たなものを吹き込むみたいな感じで、なんで僕は江ノ島のあの辺よく知らなかったのかなって行ってみてよくわかったんだけど、ここは特定の人しか行けない場所なんだと、ヨット持ってる人とかそういう人は行けたかもしれないんだけど、普通の人は行かなくてもいいようなところで、かつバイク乗りが集ったりしていてやばい感じもして、これちょっとまずいでしょって都市計画としてもね、この絶好な江ノ島という場所を小田急だのなんだのに占拠させとくのはけしからんというふうに逆に後で行って思って、馬場くんはやっぱり良くやってくれたと、自分としては間違った選択ではなかったというふうに思いました。
で、今回もう一度梗概集を送ってもらったので見てみたんだけど、さすがによく言えてるなと思いまして、江ノ島という昔から続く信仰の場であり色んな人の幸楽の場でありレジャーの場でもデートスポットでもあるかもしれないんだけど色んなものを持ち合わせたものを継承し、かつ新たな意味を付け加えるみたいな、そういう意味での更新っていうことを言っていて作品が本当にそこまでできているかはわからないですけど、少なくとも私はそれを見て感じるものがあったので良い作品じゃなかったかなと思いました。
あと野沢温泉(亀井)とかもあげたんだけど、あれは神戸の塩谷(寺西)のと割と平行でこういう街づくりもあっていいなと思ったもので、他にもいくつかよくぞやってくれたというものはあるんだけど、一番心惹かれたのは馬場くんのだったかな。

馬場：ありがとうございます。一応四年の前期から江ノ島で継続してて、テーマとかはコロコロ変わったりしてたんですけど場所だけはずっと変えないでやっていて、四年の前期に結局リサーチしている時に色んな要素が江ノ島にあるってこととか、広大な埋め立て地があるとか、実際行ってみると暴走族がいたりとかほとんど私物化されてる場所で、ここはどうにかしなきゃいけないんだろうなってずっと思いながらも、あそこって土地が大きいじゃないですか。四万平米くらい何も使われてない場所があって、そこをどうしようかなっていうことでずっと悩んでたところがあって。

高見沢：適度にあまり表現せずに放置することでバランス取ってるよね。

馬場：はい、あえて対比したほうが面白いんじゃないかってことで自分はやったんですけど、そこに関して結局もっと建てた方が良かったんじゃないかってことを最後言われてしまったのでどっちが良かったのかなっていうのが今ももやもやしてます。公園みたいにランドスケープで終わらせちゃったんですけど、そこにもう少し建築を建てるとかプログラムをもう少し強めに押した方が良かったんじゃないかっていうことを結構言われたので、それがどうだったのかなっていうのが。

高見沢：でもね、私としてはそれやったらきっとダメであの状態がスッキリしてて良かったと思うんだけど。おっしゃってることよくわかるけどね、むしろ崖側に手を加えたやつとかね堤防に手を加えようとしたこととか、本当は堤防の上なんか建てちゃいけないのかもしれないけどそれはちょっと置いといて、気持ちはよくわかるというかスッキリと提案していたところが凄く良かったし、自分自身の仕事としては藤沢市の都市計画にも関わってるんですけどあのような場所を放置しておくのはいかんと本当に思いましたよ。ありがとうございます、きっかけを与えてくれて。それでね、自分なりに見て回ったわけ、どうしてこんな状態になっているのかと、でもあそこはなぎさパーキングとかいう第三セクターみたいなのが仕切っていて、たくさん土地持ってるのに寝かしているっていうか適当にしてあって、こういうことを公共側がやっていたら何が都市計画かと怒りを感じたくらいのところなので。馬場くんも多分行った時に怒りというか問題意識というか、そのような思いでやったに違いないと。

写真：原田雄次

野原：僕もね馬場くんのやつは足したほうがいいっていっちゃったんですけど、デザインとしては凄く上手っていうかまさに既存の集落のところもうまく踏まえながら堤防のところもうまく抑え、ともすればバラバラになりそうなところをすっきり綺麗にまとめてすごい場を作っていて凄く良さそうだなと思った。でも、場としてこういうあり方が変わるんだよみたいなのがもう少し打ち出せると、PRもできて良かったのかなというところで最後一手が止まっちゃったという印象ですね(笑)凄いよくできたと僕は思いました。けど思ったほどADの先生たちは評価しないんだなと思って、まあ自分も入れてないんですけど(笑)

正林：では、野原さん的に印象に残った作品を。

高見沢：あ、野原先生是非あれ印象に残ったって言ってよ、瀬谷(河野)のやつ。

野原：ああそうですね。これはある意味さっきのでいうと都市の読み取り型みたいなやつで面白そうなのないかなと思ってあげたやつなんて、どっちかというと広島の方が一番で、瀬谷のは二番目ではありました。要は10年前とか住宅地をテーマにすることって、あんまなかったんですよね。だからまずなんてこういうなんの変哲もないとか言われそうな場所を選ぶのかなと思ったんだけど、今回コロナで地元や身近な場所を選べって言われてるから選んでるのか、そういうとこに住んでる皆さんが増えてきたからなのかなと思いました。そこで何かを見出してやろうって時にどんなことを考えるのかなっていう手がかりが歴史的市街地でもないし、街の中心部でもないしそれこそ江ノ島でもないし、ともすればただの街と思いそうなところで設計するって結構みんな苦労するんだろうなと思って…。60年代70年代に作られた街の特徴をちょっとでも読み込んで、それでツボ押しみたいなのをできる場所をどう見つけたらいいのかなみたいなのをすごい考えながら見出した答えなのかなと思いました。まあでも結局新築建ててるしとか色々あるんですけどそういうことを見出していた賞ということで一点入れたっていう感じでしたね。天邪鬼で申し訳ないんだけど、コンテクスト型があんまり増えすぎるとなんか逆に気持ちが悪いっていったらあれだけど(笑)

高見沢：なんか他のやつでこれは本当は気持ちとしては印象に残ったんだけどなってやつ教えてよ。登る建築かな？

野原：登る建築ね(笑)そうですね。けど、私のところにいる留学生が宮下パークをテーマに修論書きたいと言っているんですけど、あれこそまさに登る建築、あそこも二つ立体公園制度っていうのを使ってる場所という意味では宮下パークとあそこの場所は本当に二点共通する場所があるんだけど。そういう街の中の上の場所と街をどう繋ぐ建築を作っていくか。なんか元町のところも世界観をもっと表現できれば良かったかもしれないですね。登るとは。

上山：そうですよね。出し切れなかった感はありますね、凄い。自分でもまだよくわかってないみたいなところがちょっとあるので。(笑)これからも考えていくかなみたいなところはあります。

写真：原田雄次

野原：まあ本当は元町中華街駅から直結して上に上がれて、みんな阿部さんみたいに坂道を上がっていくのが普通の山手ルートだとすると、あそこに全然違う、そのまま上の別世界にようこそってなれる場所はあそこしかなくて、だけど今にあり方だとエスカレーターだとたらたら長くて、周りは空き店舗だし登る気しないところを、別世界に連れてってくれる上山君建築みたいなものができたら、坂は坂で魅力的だからそれはそれで登っていけばいいんだけど、ちょっと全然違う上への上がり方、登り方を上山君がデザインしたらすごいおおってなるよね。

模式的な提案からどう変えるか

正林：それでは、印象に残った作品はそれまでにして、何か結構自分たちの作品について話したんで八木橋くん的に個人的に卒業設計やってて、苦労したこととか、聞きたいこととかあったりしますかね？

八木橋：そうですね。ニュータウンと農業をつなぎ合わせるってことをやっていてその、将来像として、ニュータウンの新しい住人達が農業にどう関わっていくのかっていうのをなんとなくイメージで考えてはいて、それに向かって建築を建てていこうと思っていたんですけど、まあなんかやりきれなかったなってのはすごいあって、ニュータウンと畑っていう大きい構造というか構図みたいなのは、読めていたかはわからないですけど、広くは見えたけれども、住宅、農地と駅前と細かく分けていったときに、読み取りというか構造が掴めなくなっていって、最終的に全然将来像に向けて建築を建てていけないっていうことが、やりきれなかったこととしてあります。

高見沢：僕あれすごい良かったと思うんだけど、今の流行りはどっちかというとの農地側から駅に向かって、コンパクトシティとか言って機能を集めてみんな一緒に住みなさいっていう話なのに対して、逆ですよね。駅に降りた人が、農地に向かって突き出てるデッキに向かっていくと今までない体験ができますっていう面白い話だと思うんですよね。形もよくできていたと思うのであとはそれにストーリーさえあればみんな聞いてくれるっていうか、お前これ面白いからこういうのもうちょっとやってくれ、みたいなね。あれもあったでしょ、大通り公園の6万人の、、、

野原　さっきそれを言おうと思って。あれは惜しいなと。

高見沢：じゃあそれと絡めて話してみてよ。

野原：すごい期待で惜しいなと思って。高橋くんのやつも、八木橋くんのも、ちょっと模式的に見えてしまったというのが僕の中ではあって、駅があって、ちょっとここがあって、境界線があって…。これ地元なんですか？

八木橋：地元ではないです。

野原：捉えるときに自分の提案をしようと思ったら、農と街の接点という間のところを上手くとったなというところから、農があったらどんな楽しいことが起こるか、に入る手前で、模式的に終わっちゃったという感じがあったので、八木橋くん的にはこれを通じて、農を使ってこんな暮らしができるよ、とかこんな接点ができるよ、とかそういうところにもうちょっと踏み込んでストーリーみたいな話があったら、すごい面白い提案になったけど…。もう一歩手前くらいのところで終わっちゃって、みんなに伝わりきらなかったかなと思いました。ただ、敷地は農家さんが…とかいろいろ考えながらやっていたと思うので、その辺をちょっと突っ込んで考えたら、結構いろんな面白いことを言っているような気がしていたので、そこを意識的に提案できたら、すごい良かったと思います。高橋くんのやつも、両側に横浜橋商店街があったりとか、いろんなのがあるんだけど、デザインが凡庸にバーって連なっていく一つの帯みたいに見えちゃったのが惜しかったね。いろんな人が混ざっているんだけど、一つ屋根の下なのか、その下に人が蠢いている6万人の食卓が本当に描けていたら、すごい面白いんだろうなとは思ったんだけど…。あんまり6万人が蠢いている姿が想像できなかったのがすごい惜しかった。これこそ提案に「農」の空間が混ざっていたりだとか考えているんだけど、ただ置いただけみたいになっていて、それで生まれたところにこんな食卓ができるとか、ここで取ってきた食材を使って、こんな人たちとシェフが組んで面白い料理ができるとか、こういう人の繋がりでいろんなことがここから生まれてくるぞみたいな、6万人の食卓がこんな形で生まれてくるぞみたいなのが見えたらすごい面白そうだと思った。

高見沢：でもね、図面で見てみるとね、幼稚園のための農場とかあって、こちら側も脳が刺激されて勝手に妄想が膨んじゃって(笑)

野原：彼はそういうタイプじゃないかもしれないけど、要素がすごいあって面白いと思ったのを、もっと熱く表現してくれたら、すごい想像沸いて面白いんだけどな。図面には小さく色々書いてあるんだけど、模型とあの絵だけだと、もう一歩！ってところですね。でも彼のは面白かったですね。チェックはついてます。

高見沢：どう？勇気づけられた？(笑)

八木橋：西沢さんにもずっと図式的って言われていて、そこから踏み込むっていうのがなかなかできなかったですね。

写真：原田雄次

野原：でもそこまで整理できているのは力だと思いますよ。そういう場所を選んで、いろんな要素を入れられる場所を捕まえたわけだから、それはすごい一歩だと思うんだけど、そこに満足しちゃったというのがあるのかもしれない。

八木橋：そうですね。結構終盤失速気味だったので。

高見沢：八木橋くんはコロナは意識してなかったんですか？

八木橋：そんなに意識はしてなかったですね。

高見沢：今「東京裏返し」っていう吉見俊哉先生の本を読んでいるんだけど、八木橋くんの場合、例えば、「ニュータウン裏返し」とかって名前をつけちゃって、今までは都市機能が中央に集まるのが街でしたが、それを裏返しちゃいますと。農地へと誘って、コロナから逃げた人がコロニーを作って、そこで生産に勤しむとか、教育するとか。そんなようにしちゃったら、ぎょえーって感じで、すごいなって思いますけどね。6万人の食卓でも私こんなこと言いましたよね。

野原：それこそ、住宅の住まい方の場と、そういうのがマッチしていたのかわからないけど、そういうのがもっと上手く混ざれるところは、八木橋くんがデザインしてみたりとか色々すると、ここで住むも良し、訪れるも良し、育てるも良し、みたいなのがもっとアピールできたのかなと思いますね。

八木橋：そうですね。

高見沢：ところで、「東京裏返し」って知ってる？

八木橋：知らないです。

高見沢：野原先生好きそうな本なんだけどさ。

野原：まだ読んでないです。存在は知ってます。（笑）

高見沢：この間、都市科学部で「都市科学事典」っていうのができたの知ってる？

馬場：学内メールで知りました。

吉見俊哉　集英社新書　2020年出版
『東京裏返し　社会学的町歩きガイド』

高見沢：結構面白くてさ、吉見先生っていう東大の先生がいるんだけど、その人が書いた「東京裏返し」っていう本で、見てみればこれ知ってるよっていうことが書いてあるんだけどね。けど、ああいう論法は見といてもいいんじゃないかと思いましたけどね。

写真：原田雄次

自分のスタイル見つける時期

馬場：話が戻ってしまうんですけど、ストーリーがあればっていう話で、例えば、今の八木橋のであれば、「農」というものを使ってどう楽しいことができるかみたいなことを、みんなある程度は考えていると思うんですけど、いまいち提案に持っていくほどの想像力がなくて、農業と建築を結びつけたらなんか楽しいことができるんだろうなっていうところから、具体的にそういう楽しいことを見つけ出すのがなかなか難しくて、それってやっぱりもう少しフィールドに出て、リサーチしないと見つからないものなんでしょうか。

写真：原田雄次

野原：その差こそが建築家の差だったりする気がする。自分のスタイルをどれにするかを見つけるっていう作業を今やっている最中というか。我々は年齢が上がっていけば、経験とか知っていることが増えて、つなげるものが増えるけど、みんなはまだそういうものが少ない。その中で、アイデア的にジャンプして考える人もいれば、農家の人に話を聞いて、それをヒントとして考える人もいるし、人ぞれぞれじゃないかと思うよね。自分のその見つけ方をどういうところに持っていけばいいかを考えること自体が、自分がどんな建築家になりたいかということとリンクしていると思う。答えはないけど、自分なりにそのルートをどんどん見つける練習をしていくのがいいと思いますけどね。例えば、富永美保さんって本当にズカズカと人のところに聞きに行って、いろんな話からヒントを集めたりしている。そういう人もいるし、それぞれなのかなと思いますね。でも、自分なりの見つけ方は持っていた方がいいと思いますね。みんなそこで苦しんでいるんだね。（笑）

高見沢：割と年齢近い尹先生はどうですか。

尹：見ている先生方と比べると経験値の圧倒的な差というか、知らないことがたくさんあるから、想像できないこともたくさんあるのかなと思うんですよ。でも必ずしも、知っているからいいものが作れるわけでもなくて、そのバランスなのかなと思うんですよ。さっきの自分が経験したこととか発見したものをちゃんとピックアップできる力っていうのもあると思うんですけど、そこにいく段階では、いろんなものを知るというのも重要なのかなと思っています。本とかね。さっきの「東京裏返し」とか。みなさん街を見るといっても、その街の知らないことはたくさんあると思います。ぜひいろんな経験した方がいいと思いますけど、今年はコロナとかあっていろんなところ行けなかったのは本当に惜しいなと思いますね。

都市計画の近年の流れと卒業設計

正林：なるほど。ありがとうございます。都市計画の近年の流れと卒業設計が扱っているテーマは差っていうのはあるのかというのを聞きたいです。

尹：問題意識そのものに関してはギャップはないだろうと思っています。ただ、都市計画としては、必ず建築が答えではない場合も結構あります。つまり人の力とか、コミュニティの力とか制度的な取り組みとか、建築そのものでなくても利活用とかリノベーションとか、いろいろあるんですよね。そういう問題を解決するのに、あらゆる手段がある中で建築を提案しようとすると大変だろうということは分かります。ただ、私も卒業設計を評価するときに、そういう視点でも見るんですけど、つまり、コストパフォーマンスじゃないんですよね。それを建てるのにどれだけの合意形成とかいろんな権利とかやってできたものが、あまりその後の街をよくするとか、すごく良さげとか、そうじゃないと、あまり考えられてないなと思ってしまうんですよね。つまり、あまり建築を建ててはいけないということではないんですけど、他のあらゆる手段もある中で、この建築がすごいんだっていう、そこを超えた提案として出していると、すごくいいなって思うんですよね。ですから、問題意識そのものはギャップはないんだと思います。ただし、求められるレベルが、ただのアイデアじゃ通じないぞってことなのかなと思います。

高見沢：私が期待するのは逆で、都市計画の研究というのは大体もうわかってきたことをどう着地させるかっていうのが多いんですよね。再開発はもっとわかっているというか、制度でがんじがらめになっていて、こういう建築建てたいと思っても、権利者がいっぱいいるんで、そういう人たちの言うことを聞いているうちに凡庸なものになってしまうと。再開発事業をやって、良い建築って一個もないと思いますよ。でも、若い感性に期待したいのは、そういうのとは逆で、こういう風に建築の力を借りて作れば、こんなにみんな幸せになりますよというのを提示してほしいなと。さっきの農業の例であれば、コロナも当然考えて、ニュータウンのこういうところに農地があるっていうのは、元々土地利用計画で残したわけだけど、でも、新たにこんな風に使えそうだなって自分としては思っているというのを正直に突き詰めて提示することで、ある種の我々にとっての指針となるというぐらい思っていて、だから、都市計画というのはむしろ後についてくるって思ってもらってもいいんじゃないかなと思います。それぐらい建築というのは期待される力があると思うので、力と言っても、変に人を威圧するとか、デザインがカッチョ良いとかそういうのではなくて、社会の目指すべき方向をきらりと表している。若者だから、本当にヒリヒリするぐらいきらりとできる感性を持っているはずだと信じているので、それが現れていればなんでも良いかなという風に思います。建築家ってのはそういうのを作る前からその先がこんなに素晴らしくなるんだってのを表現できる人なんじゃないかと。もちろん作ったものもまだ10年ぐらい先の都市計画よりもずいぶん進んだやつを示している。あるいは永遠にできないことを建築が示していると思う。そういうもんじゃないかと思いますので、都市計画研究室くるとなんかできると思うと間違いて、逆に時代が戻っちゃう可能性もあるので、そういうつもりではこないで、「自分がこんなふうに考えてるんだけどどうすかね」って言って「へえ、すごいよね」と、我々いつもこんな限界があってできないんだけど、それをもっともっと磨いてやったらいいんじゃないと言ってくれるところだと思ってもらった方がいいかなと思います。

学生へひとこと

正林：なるほど。長い間ありがとうございました。最後に私たち学生に対して何か一言いただきたいです。では、高見沢さんお願いします。

高見沢：さっきから言ってるように、建築の若い人たちに期待するというか希望するのは、その若い感性を表現して世の中を引っ張っていく力があるんだと、少なくとも我々横浜国大の卒業生はそういう力があると思うので、それを信じてもし世の中が足りないと思うのだったら、それを俺が、俺が変えてやるっていう性格じゃないかもしれないんだけど、それをやることで必ず日本が元気になるし、みんなが喜んでくれると思うので、さらに自分の力を磨いていって欲しいなと思います。

正林：ありがとうございます。野原先生お願いします。

野原：卒業設計いつも思いますけど、言えって言われてるから言ってるけど、本当に時間をかけただけあってすごく面白い。僕たちも刺激になる話っていうのがいつもいっぱいあって、こちらがむしろいろいろ考えさせられちゃうっていうか、いろいろ考えちゃうきっかけがいっぱい出てきて、毎回勝手ながら楽しいなっていつも聞かさせてもらってるんです。皆さんもぜひ、楽しんでいるとは思うんですけど、楽しんでやってくださいっていうか、悲壮感を持つというよりは、まず自分で建築考えたり、街考えるの楽しいな、というのがまず第一の原点かなというふうに思っています。あとはなんていうのかな、みんな優秀なので、ある種答えラインを探しちゃうところがあると思うんですけど、やっぱ今自分が思っていることっていうか考えてること出してみたら、「ああ全然こんなこと言うんだ」みたいなのをぶつけられる機会って、やっぱ社会人になっちゃうとだんだん、本当にみんなアジャストしちゃうんで、お金もらって仕事しなきゃいけないから、どうしてもそういう中に、さっきの再開発の話なんかもう事業で誰だってこれでいつまでにどうするって、もうやるしかないってどんどんそっちいっちゃうんですけど、それをやらなくていいってのがある種の特権というか、なのでぶつけて「ああこんなこと言われんだ」みたいなのをやる機会ってすごい貴重だと思うので、ぜひ思ったことをどんどんぶつけてくれるといいんじゃないかなというふうに思ったので、自信持ってというか、自分の思ったことでやって欲しいなと思いました。以上です。

正林：ありがとうございます。では尹さんお願いします。

尹：はい。皆さんお疲れ様でした。私も卒業設計を教員になってみるのは2年しかないですけど、やってる側が結構大変なのは承知してます。教員としてみるときに、単に評価するっていう感じではないです。学生が何を考えて、ここまでこういう表現をしてこういう言い方をして、こういうものを提案するんだっていうのは誤解しないように、努力がわかるから誤解したくないなと個人的には思っています。皆さんがやっているものそのものは先生方もちゃんとわかっているし、その努力っていうものは認識されてるとは思うので、今回票が入る入らない、評価が良い悪いはあんまり気にしないで、ただ人に言われたことに関してはちゃんと考えるっていうか、自分だけが考えていたものが世の中に出て、ちゃんと人に言われる、コメントされるってことは、客観的に見られる瞬間だと思うんですね。そういう場というか瞬間というものをとても大事にして欲しいなっていうことと、次につなげるっていうかちゃんと自分に向き合う、「もう終わったからいいや」ではなくて、ちゃんと自分が次やろうとしている勉強なら勉強、あるいは仕事なら仕事でちゃんと活かして欲しいなと思います。だから先ほど野原先生から楽しんでっていうことがあったんですけど、私も、考える、作る、提案する、その喜びがすごくあるんだと思います。考え出した時の喜びだとか、先生が評価してくれた時の喜びとか、多分社会人になっても続くと思うので、ぜひその喜び、学生時代の経験をちゃんと踏まえて立派な、立派なというか、自分たちの夢に向かって頑張って欲しいと思います。以上です。

正林：本日はありがとうございました。

先生方のご紹介

高見沢 実　タカミザワ・ミノル

東京大学工学部都市工学科卒業。同大学院終了。92年東京大学工学部都市工学科助教授。96年より横浜国立大学に移り、08年より同大学工学研究院教授。現在、同大学院都市イノベーション研究院教授。
研究分野：都市計画、まちづくり、地域、制度、住環境

野原 卓　ノハラ・タク

東京大学工学部都市工学科卒業。同大学院工学系研究科都市工学専攻修士課程修了。00～03年　（株）久米設計。03～05年東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助教手、05～08年同国際都市再生研究センター特任助手。08～10年同先端科学技術センター助教（09年論文博士（工学）取得）。2010年より横浜国立大学大学院准教授、11年より現在、同大学院都市イノベーション研究院准教授。一級建築士。
研究分野：都市デザイン、都市計画、まちづくり、景観

尹 莊植　ユン・ジャンシク

横浜国立大学工学部建築学科卒業。同大学大学院修了。08～11年Tomoon Architects & Engineers。16年横浜国立大学博士課程修了。17～19年秋田県立大学システム科学技術学部特任助教。現在、同大学院都市イノベーション研究院教授。
研究分野：都市計画、まちづくり、マネージメント、条例